

「今は太った雌牛の時代にいるのだろうか？」

…消費者物価について…

メキシコでの昼食時は過去の経験と違って女性たちとの昼食が多く、それぞれ彼女らはプロフェッショナルな役割を担っているのだが、その折の話題は彼女らの同僚の噂話や上司の批判、さらには身の回りのことが多いので会話に参加しにくい、たまたまある日に経済の話題になった。

経済の話といってもお茶の間経済の軌を脱していないので、この種の話なら得意ではないが参加しやすい。一丁勉強した知識をひけらかせてやれとばかりに、表題のもとになった、スペイン語の熟語で、「**estar en época de vacas gordas**」(エスター エン エポカ デ バカス ゴルダスと発音する)(直訳すると太った雌牛の時代にいるというのだが、ものがあふれた幸運な時代にいるという意味)という、ちょっと発想的に面白い熟語を使ったのだが、一緒にいた彼女たちから、「何それ？」という顔をされてしまった。

私のスペイン語会話能力のせいかなと思ってみたのだが、どうも違うようなので、別の表現で同じニュアンスを伝えたら、「意味はわかったがメキシコではこのような言葉は使わない」と一蹴されてしまった。

この熟語は白水社の西和辞典にも載っているし、スペインで発行された口語の熟語集にも載っているので、私としては自信たっぷりのつもりで使ったのだが、スペイン語圏と言っても広うござんすというところである。

今回は語学の話をするつもりではないので、話しの発端となった経済へテーマを戻す。ジェトロの資料によると、当地の2005年1～11月の消費者物価上昇率は2.7%に納まっており、政府目標の4%未満の達成は確実という。

政府は2005年のGDP成長率を3.8%と見込でおり、経済は成長過程にあるものの、現政権が発足当初に目指していた年間7%の成長率には程遠いと言うが、1990年代中頃の経済危機から比べると、まさに、「今は牛が太る時代にいる」というわけである。

こんなマクロの経済指標は門外漢の私にとっては、生活実感としてはピンとこないが、過日地元一流紙の経済欄を見ていたら、英経済誌エコノミスト系の調査機関が世界約130都市を対象に昨年秋に実施した生活費調査^^この調査は、米ニューヨークの物価を100として日用品からゴルフのプレー代まで企業幹部が世界各国の都市に駐在する場合のコストを集計、ドル換算し指数化したという^^の結果では、メキシコシティは世界で57位を占め、中南米では首位という記事が相当大きく出ていた。

東京はノルウェーの首都オスロに続いて2位にランクされ、1991年から前回調査(2003年)まで堅持していたトップから後退したというニュースはすでに日本でも報道されたと思います。

物価の高い低いは、海外からの観光客数や貿易などに影響が出る非常に重要なことで、経済成長度を反映しているので低すぎるのもよくないけれど、企業を退職して外国でのボランティア活動で、収入が限られている私にとっては、物価は安いことのほうが望ましいのは確かである。

しかし実際に外国で暮らしてみると、この種の数字をどう判断して言いか分らない。

世界の色々な国や都市の物価を比較をするのは簡単ではないと思うからである。

買い求める本人が安いと感ずれば、値段は関係がなくなるし、同じ商品でも質が違えば、価格が違って当然だし、野菜や穀物、肉類などは季節によって値段も違えば、買い求める場所によっても

異なってくる。

また、現地の人のどのレベルに合わせて生活をしていくかによっても数値はかわってしまう。また、先進国レベルの生活を、発展途上国で求めようとするれば、その先進国以上に高コストになるのは当然だろう。

また当地のように治安の悪い地域に住むと住宅費など安全対策など、有形無形の特別費用を考慮すると、世界で何番目といういかにも安そうな数字に対して生活実感としては、そのまま肯定するわけにはいかなくなる。

かように物価統計は判断の基準が難しいが、ここに面白い統計がある。

世界各国の物価を比較する場合に、マクドナルドで販売されているビッグマック1個の価格を比較するというものである。

この数値は、「ビッグ・マック・インデックス」と呼ばれており(右の表参照)、イギリスの経済専門誌、『エコノミスト』によって考案された。

ビッグマックはほぼ全世界で同一品質のものが販売され、原材料費や店舗の光熱費、店員の労働賃金など、さまざまな要因を元に単価が決定されるため、基準となった主な理由とされる。

現在、エコノミスト誌はビッグマック指数のほか、スターバックス指数やコココーラマップなどの指数も発表している。なんと、日本よりもメキシコの方が高いのである。

この原料である肉や乳製品、野菜あるいは人件費などは、日本より遙かに安いと思われるメキシコであるが、こうやって製品になってみるとどういわけか、結構高くなっているのである。

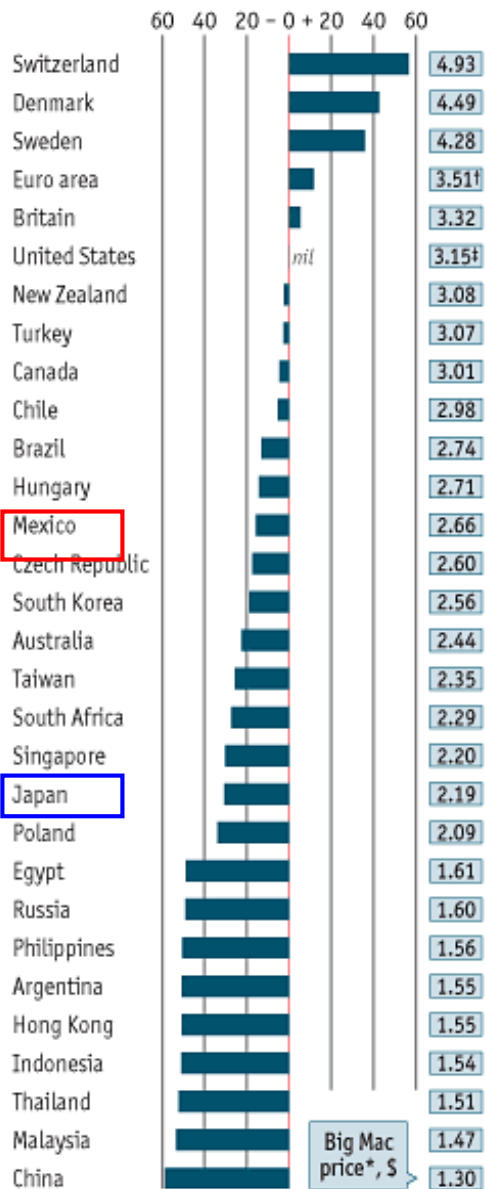
ISOの技術指導をしている私としては、このことを検証し証拠を確認しないと気持ちが治まらない。早速、マクドナルドではないが、外出先である程度混んでいた地元のハンバーガー屋に入ってみたのだが、ビッグではない普通の大きさのハンバーグ1個と缶入りコココーラ1缶、揚げたジャガイモ少々で日本円で800円く

(エコノミスト誌のホームページより)

Jan 12th 2006

Big Mac index

Local currency under (-)/over (+) valuation against the dollar, %



*At market exchange rate (January 9th)
†Weighted average of member countries
‡Average of four cities

Source: The Economist using McDonald's price data

らいかかってしまった。

これだけでは他と比べて高いのかどうかは分からないと思うので、我々が普段行く勤務先の周辺の何軒かの、大衆レストラン(大衆食堂と言ったほうが感じが分かる)の昼食の標準的な定食メニュー(コミーダ コリーダという)と比較すると、スープ、サラダ、お代わり自由の季節のナチュラルジュース、パンに最後に選択性の肉を主体とした一品料理、デザートで大体、500円から700円くらいで、満腹感や味の点で数段ハンバーグより勝る。

マクドナルドと他の店の違いはあるものの、検証は成功したが、原因はわからない。多分、街中の屋台の立ち食いで食べればその何分の一かの値段だろう。

下に例示したとおり、原材料は日本と比較して安いと感ずるが(これは私の感覚であって地元の人は別の考えもあるかもしれない)、いったん加工したり特殊なものは日本と変わらないか高いものもある。

このように物価の統計は取り方によって値段が変わり、統計で中南米のなかで一番物価が安いとされた、パラグアイの首都アスンシオンの住民でさえも、実態は物価が安いと感じている人はどの程度いるのだろうか。

結局は、物価の順位が世界の何位だかは、庶民レベルではあまり関心がないのかもしれないし、本当の意味での、「牛が太る時代」はいつになってもこないのかもしれない。

(No.3) (2006年2月19日)

*ちなみに最近私が買い物をした値段を記すと、(以下1ペソ11円で換算)小粒のトマト3個:80円、バナナ一房(5本):55円、アボガド3個:178円大粒バレンシアオレンジ3個61円、モヤシ130g:19円、大粒マッシュルーム230g:84円、キャベツ1玉:81円、キュウリ2本40円、ポロネギ500g:77円、良質ハム1Kg:1365円、豚肉ロース1Kg:550円、普通牛肉1Kg:693円、合い挽き挽肉1Kg:572円
(肉類は1kgに換算した)

缶ビール(340ml、12本入りパック):728円、5リットル入り飲料水:138円、ヨーグルト1Kg:251円、スープ用インスタントメン1パック:25円、サラダ用加工済み野菜200g:286円、SBカレールー:706円、ネギ500g:174円、エノキ200g:834円、納豆4パック:474円、冷凍讃岐うどん4パック:860円、スズキの刺身170g:656円クリーニング: Yシャツ1枚:353円、背広(上下):662円

*理髪:散髪だけで992円(約20分で終了する)

「花見酒の商売」

・・・国力と個人収入・・・

先月末地元の有力新聞に、当地メキシコの2005年の一人当たりの国内総生産(GDP)が7456.5ドルで昨年同期比11%上昇したと出ている。この数値が良いのか悪いのかどうか、技術系の人間で経済には門外漢のボラッチョ・ボニートとしては分からないので、いつもの癖でさっそく他国と比較してみた一例が、別表のMF等の2005年度版の資料から作ったものがある。

180カ国以上ある国・地域を全部挙げてもこれまた何がなんだか分からないので、アメリカ、日本、メキシコ、最近とみに世界中で注目されている中国、国は小さいながらも一人当たりの数値が高いルクセンブルグをひとまとめにしてみた。

この表からもどう分析していいのか、これまた頭が混乱してくるが、アメリカのように国も個人もそれ相応に上位にある国と、国総体では上位にあるものの個人では、相当下位になってしまう国もあり、国の豊かさと個人の豊かさの数値が異なっているということや、メキシコは相当な経済大国であるということが分かる。

個人レベルで見ても、「おれはもって稼いでいるよ」と言う人も居れば、「へえ～、世間はこんなにも稼いでいるのか」と言う人もいるだろう。

世界でもベストテンにももう少しで届きそうな、メキシコを数値でなく、現地を目線で見ると、現実的にも街には新しい車があふれ、皆スピードを競って走り回り、街のあちこちには高層建築が立ち並んでいて、経済が進展しているのは理解できる。

一方では、街中の道路上には時に歩行者の通行の邪魔にもなるほど、個人の立ち食いの店や駄菓子類の販売の露店がいたるところにあって、持てる層と持てない層の所得格差が進んでいるのではないかという実感がする。

これを検証すべく、ボラッチョ・ボニートは勇を鼓して露店で物を買ってみたのである。ISOの指導をしている者として、憶測でものを言えないし、何事にも検証し、証拠を示さないと気持ちが治まらないからである。あまり買いたい物がないのでチューインガムを1個だけ買い、別の露天でボトルの飲料水を1本買ってみた。コンビニでも同じものを購入し、さらに別の日に近くの大型スーパーで値段を確認して、三者を比較したところ、意外だったが、例えば飲料水500ミリリットルボトルの値段差は、大型スーパー(約50円) < 露店(55円) < コンビニ(60円)であった。ただしコンビニの名誉のために述べると、他の二者と異なり冷蔵庫で冷やされており飲みやすかった。

学術論文ではないのでこれ以上の検証はしていないが、確かにチューインガム1個を買うためだけにスーパーやコンビニへは入り難く、露店でも結構需要と供給の関係は成り立っているのかもしれない。私はそこで面白い光景を見てしまったのです。なんとタバコの本一本をばらで売っていたのだった。ここでまたまた検証するためにしばらく、別のところを見る振りをしてその店を眺めていた。単純に定価を本数で割った値段で販売しているか、若干でも上乘せしているかどうかは分からない。タバコを吸いたくても1箱を買えない人がいるせいか、そのときも一本買いする人を見かけたのだった。

記憶に間違いが無ければ、確か昭和40年代の前半頃であろうか、日本でも地下鉄の回数券を名人の手

さばきでばらして、一枚一枚売っているオバサンを見かけたことがあるが、購入者としてはばらした1枚の回数券は定価の値段で購入出来るし、販売者は差額分だけ儲けると言うもので、タバコのほうは1本あたりの単価にしてみれば、若干高い場合もあるだろうが発想は似ていて、ささやかな庶民の知恵が働いていると言えなくもない。

しかしこうした商売では、日々の売上額もたいしたものでは無いだろうし、品物を買う客種を見ても、購買力のある階層は、このような場所で買うこと自体多くはない筈である。従って、これらの商売が成り立っているのは、貧しい人たちが、お互いに少しずつ買いっこをしていることによるものとの推測が成り立つ。

まさに落語の「花見酒」に似た展開である。このストーリーはちょっと頭の足りない二人の若者が、彼らだけの間で売り手と買い手になって金のやり取りを行って、商品を売ったり買ったりして商売をしたと思っていたところ、本来は他人に売って何がしかの儲けを得ようとした商品たる花見酒を二人で飲んでしまっ、結局手元に残ったのは元手の金だけだったと言うのだ。

彼らの商売もこれと似ていて、わずかに得た金は一瞬間手元に留まるだけで、次の瞬間には右ポケットから左のポケットへ移るがごとく、右から左へ流れてしまうだろう。

街の庶民生活のすべてを書き尽くすことはできないし、経済指標は前回の No.3 のも書いたように、生活の実感を表しにくい、上記の事象は中南米の経済大国メキシコだけの特殊な現象ではなく、他の中南米諸国でも見られる光景だと思う。

「La lucha por la vida sólo no es un mal, sino que es la que conserva en el hombre sus cualidades libre」 (生きる戦いは悪でないばかりか、人がその自由な特質を保持する戦いなのだ)

この言葉はどういうシチュエーションで述べられたかは知らないが、まさに当てはまるような気がして、昔本で読んだ言葉がふと頭を過ぎったのだった。

正規の労働就業者でないものについての論評が新聞に載っていたこともあるが、現実には、私の周辺にいる方々と違って、多くの者が正規の勤めではない仕事で日銭を稼いでいることも多く、彼らにとっては毎日が生活を賭けた闘いの連続なのである。

(No.4) (2006年3月4日)

項目 (国別)	名目GDP (100万US\$)	一人当たりGDP (US\$)	購買力平価 GDP(US\$)	購買力換算一人 当たり(US\$)
アメリカ 合衆国	12,438,873 (順位1位)	41916.596 (順位8位)	11兆7500億 (順位1位)	40,100 (順位2位)
日本	4,799,061 (順位2位)	37566.304 (順位15位)	3兆7450億 (順位3位)	29,400 (順位15位)
中華人民 共和国	1,843,117 (順位6位)	1410.703 (順位111位)	7兆2620億 (順位2位)	5,600 (順位91位)
メキシコ	714,530 (順位14位)	6770.575 (順位53位)	1兆0060億 (順位12位)	9,600 (順位61位)
ルクセン ブルク	35,620 (順位61位)	77594.926 (順位1位)	272億7000万 (順位92位)	58,900 (順位1位)

注：順位は約180カ国の内の順位数

「ジニ係数と貧困率」

…不平等社会その1…

これまでの報告は身近な生活実感から書いてきたのだが、それを裏付ける何か客観的なデータがないかと ISO 的感覚で思案していた。今までもそれ相応の統計データを幾つかは入れて、客観性を出来るだけ持たせたつもりであるが、表面的にしか見ていないのではないかと危惧していたからである。

今回ついに見つけたのである。ついにとっても、私自身が経済学に疎いせいもあって、現在まで知らなかっただけであり、その方面の知識のある方なら、

「なあ～んだ。そんなこと知っているよ」というところだろうし、すでに一部のマスコミには取り上げられている。

経済学の用語で、「ジニ係数 (Gini coefficient または Gini's coefficient)」と言うのがある。

(余談だが私のコンピュータでは持ち主を考えてか、すぐに、「痔に」と変換されてしまう)

所得や資産の不平等さを示す指標で、全員の富がまったく同じ完全平等を「0」、すべての富が1人に集中する完全不平等を「1」とし、数値が1に近いほど貧富の差が大きいことを示し、

0.5 はつまり国民の総所得の四分の三を、所得の高い方の四分の一の人で占めている状態を意味する。

経済協力開発機構 (OECD) が 2005年2月に発表した、「OECD 諸国における所得分配と貧困」(OECD ワーキングレポート22) (関心のある方は、この部分だけでも英文80頁ほどあり、読むには少々こたえるが、<http://www.oecd.org/dataoecd/4819/34483698> を参照して下さい)

加盟国30カ国の統計をもとに、このジニ係数を高い順にベストテンに並べてみたのが上表である。(単位は100倍してある) 愛国者ですね～！すぐに日本と他国を比較したがるのである。

何と我が愛すべきメキシコと日本は誇るべきではないが、堂々のベストテン入りである。特にメキシコにいたってはトップの富の遍在ぶりである。ジニ係数の低い国は、デンマーク22. 5、スウェーデン24. 3、オランダ25. 1、オーストリア25. 2などである。

日本にとって、もっとショッキングなデータも同報告書に掲載されている。次表は、貧困率を OECD 加盟国の高い順を並べたものである。貧困率とは、国民のうち何%が貧困であることを示すもので、OECD は全家計平均所得の半分以下の所得しかない家計を貧困層と定義づけている。

ここでもメキシコはトップで、何と日本は5位にランクアップである。この表から言うと日本は6～7人に一人が貧困層に分類されることになる。

本報告には出していないが、貧困率拡大のペースでも国際比較で群を抜いており、現代の日本社会は、ここ数年世界の他の国々と比べても、所得格差と貧困が顕著に拡大しているという。

高度経済成長期には、「一億総中流意識」などといわれたものだが、どうもそのようなことは、もう遠い昔の話のようで、すでに日本は世界でも屈指の「不平等社会」になったと指摘され始めた。

国名	ジニ係数
メキシコ	46. 7
トルコ	43. 9
ポーランド	36. 7
アメリカ	35. 7
ポルトガル	35. 6
イタリア	34. 7
ギリシャ	34. 5
ニュージーランド	33. 7
イギリス	32. 6
日本	31. 4
OECD平均	30. 8

反対に、貧困率が最も低いのはデンマーク4.3%で、以下、チェコ4.3%、スウェーデン5.3%、ルクセンブルク5.5%で、ドイツ8.9%、フランス7.0%となっている。

前のジニ係数の低い国と後半の貧困率の低い国をみると、ヨーロッパの落ち着いた国が思い浮かばれる。

GDP 世界14位の経済大国メキシコではあるが、ここに挙げた数値は、別の項でも報告したとおり、世界3位の大富豪氏もおれば、私に近寄ってくる物乞いの数の多さからも、矛盾を抱えていると言う事が何となく実感的に分かる気がするし、統計的にも実証されたのである。

一方別の観点から見ると、日本や、メキシコなどのようにアメリカに大きく影響されている国が、両方ともアメリカを交えて上位に入っていることについては、このまま今の世の中が続いていて良いのかとも思えてくる。日本が本来持っている良さを失って、すべてにアメリカ的な考えが良いとは思えない。

ある程度の格差は競争社会においては必要悪であり、容認される面もあると思われるが、それが進みすぎて、まさに題名の通りの世界にならないことを願うのみである。社会保障や公共投資でも思ったほど日本は高位ではなく、すでに法律上も老人社会に入った私としては心配が募るばかりである。

メキシコの現状を報告するつもりが、データが近くに存在していたので、書いているうちに別な方向に少し曲がりかけたのでここで終わりにしたいと思う。外から見ていると、少しは客観的に見えると言うことでお許しを願いたい。

言いたいことは色々あるのだが、今は立場上言えず、若い頃学習した、兼好法師の「徒然草」第19段にいう、「おぼしきこと言わぬは(心に思っていることを言わないのは)腹ふくるるわざ(腹がはる) (ような気がする)」の心境である。

そんなことを言う前に、高齢者になるとジニ係数が高くなる、つまり格差が広がるといわれているので、メキシコでボランティア活動などと暢気に考えないで、自分の足元をもっと固めろよと言われてたり、私ごときが何を言っても、「ごまめの歯軋り」だよとか、「犬の遠吠だよ」と一蹴されるのがおちであろう。

(No.12) (2000年5月14日)

国名	貧困率
メキシコ	20.3
アメリカ	17.1
トルコ	15.9
アイルランド	15.4
日本	15.3
ポルトガル	13.7
ギリシャ	13.5
イタリア	12.9
スペイン	11.5
イギリス	11.4
OECD平均	10.4



みやげ物屋の店先

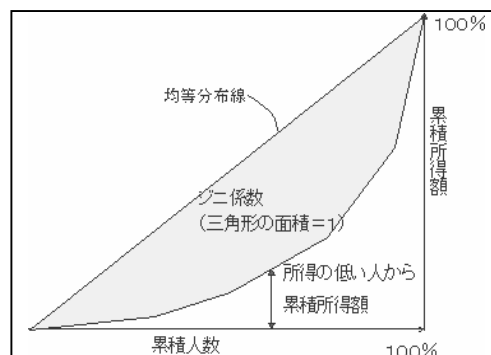
「解説」

ここからは若干専門的で少々分かりにくく、色々なところの受け売りで申し訳ないが、数式は省略して説明だけ書いておく。

ジニ係数は、1936年にイタリアの数理統計学者、コッラド・ジニ(Corrado Gini)が考案した指標で、ローレンツ曲線(集団を所得の低い順に並べ、その累積比率を横軸に、所得額の累積比率を縦軸に描いた曲線)を描くことで求められる。国や集団の構成員の所得格差が、全体として平均所得に対しどれだけになるかを表す。

「0」は「完全平等」の状態を、「1」は1人が全所得を独占している「完全不平等」状態を示す。格差が小さいほど0に近く、格差が大きいほど1に近づく。

一般的には、0.4を超えれば不平等の歪みが顕著になる。0.5を超えれば深刻な状態となり、是正が必要となるとされている。



目安として、下記の通りであるが、一般的には0.2~0.3(市場経済(自由経済)においては0.3~0.4。これは市場経済では競争を促すため、格差が生じやすくなる)が通常の間とされている。なお、0.5を超えると格差が大きく社会の歪みが許容範囲を超えるので、政策などで是正することが必要とされる。

ジニ係数の目安	
~0.1	平準化が仕組まれる人為的な背景がある
0.1~0.2	相当平等だが向上への努力を阻害する懸念がある
0.2~0.3	社会で一般にある通常配分型
0.3~0.4	少し格差があるが、競争の中での向上には好ましい面もある
0.4~0.5	格差がきつい
0.5~	特段の事情がない限り是正を要する